

イザヤ書17-18章「衰える栄光」

1A ダマスコの瓦礫 17

1B 失われた王国 1-3

2B 荒れ果てるイスラエル 4-11

1C わずかに残された者 4-6

2C 自分の造られた方 7-11

3B 国々のどよめき 12-14

2A 力強い国クシュ 18

1B 誇り高き国 1-2

2B 暑さの静けさ 3-6

3B シオンの山への贈り物 7

本文

イザヤ書 17 章をお開きください。私たちは、イスラエルの周辺の国々に対する、神の預言を見て行っています。周囲の国々の特徴は、「イスラエルを通して、シオンにおられる神の証しを見聞きしている。」ということです。シオンに救いがあるのに、そこに近づかないという問題があります。イスラエルを通して、自分自身が神との関係がどうなっているかが、明らかにされます。イスラエルが正しいということではなく、イスラエルにおられる神が、イスラエルを通して周りの人々にご自分の輝きをもって照らされるのです。これまでペリシテ、バビロン、モアブと見てきました。17章は、ダマスコから始まります。

1A ダマスコの瓦礫 17

1B 失われた王国 1-3

¹ ダマスコについての宣告。「見よ。ダマスコは取り去られて都でなくなり、瓦礫の山となる。² アロエルの町々は捨てられて、家畜の群れのものとなり、群れはそこに伏して、それを脅かす者はいなくなる。³ エフライムは要塞を失い、ダマスコは王国を失う。アラムの残った者はイスラエルの子らの栄光のようになる。——万軍の主のことば。

ダマスコは、アラムの首都です。アラムとはシリアの聖書時代の名称です。アラムは創世記の時代から出てきます。アブラハムの家族がカナンに行く前に、一時期ハランに滞在していましたが、そこがアラムの地域です。リベカの兄ラバンは、パダン・アラムにいました。そしてダマスコは、中東の歴史の中で、世界最古の都と言われています。アブラハムが、ロトを救出するためにダマスコまで行ったことが記されています。今はユネスコの世界遺産になっています。

新約聖書にも、登場しますね。あのサウロが、ダマスコに行く途上でイエスご自身に会うのです。そして、アナニアというキリストの弟子は、彼の上に手を置くように、主に命じられています。「使 9:11 立って、『まっすぐ』と呼ばれる通りに行き、ユダの家にいるサウロという名のタルソ人を訪ねなさい。彼はそこで祈っています。」この「まっすぐ」という道は、今もダマスカスの旧市街にあります。東西に伸びているローマの町の通りです。

そして、旧約時代に戻りますが、ここでイザヤが預言しているダマスコは、ソロモンの統治末期から始まっている王国の都です。ツォバの王ハダドエゼルから逃亡した、レズンという男が略奪隊の隊長となり、ダマスコを支配しました(1列王 11:24)。その時からのアラムは、絶えずイスラエルと戦っていました。有名な逸話は、アラムの将軍ナアマンの、らい病からの癒しです。敵国の将軍が、ユダヤ人の女奴隷の勧めによって、預言者エリシャに会い、らい病がヨルダン川で清められ、イスラエルの神に頼るといふ、贖いの話です。

しかし、ダマスコの都がその栄光を失うことになるのは、皮肉にもイスラエルと手を組んだ時です。アハズがユダの王であった時、アラムはイスラエルの王と共謀して、ユダを攻めようとしていました。そこでアハズは、アッシリアに貢ぎ物を持っていき、助けを求めました。アッシリアはその要望に応じて、アラムと北イスラエルを攻めました。(その時に、アルノン川沿いにある、モアブのアロエルの町々にまで南下していることが分かります。)ダマスコは紀元前 732 年に陥落し、サマリヤはその十年後、紀元前 722 年に陥落しました。ダマスコに対する栄光が衰えると宣告している中で、エフライム、つまりイスラエルの栄光が衰えることを話しているのはそのためです。

これはまさに、この前学んだヤコブの手紙 4 章に出てきた内容です。世の友になることは、神に敵対することです。「4:4 節操のない者たち。世を愛することは神に敵対することだと分からないのですか。世の友になりたいと思う者はだれでも、自分を神の敵としているのです。」ユダを攻めて、自分たちの思い通りにさせようというのは、自分の貪りに他なりません。しかし、そのように思い高ぶることは、神に敵対することであり、自ら滅びを招きます。

ところで、「ダマスコは取り去られて都でなくなり、瓦礫の山となる。」という言葉は、厳密に言うと、アッシリアによって攻められましたが、ダマスコの歴史は連綿と続いていました。しかし、瓦礫の山となるという場面を、近年、私たちは見ました。シリア内戦です。ダマスコの近郊が空爆で瓦礫の山となりました。終わりの日には、完全に瓦礫の山になる時が来るでしょう。

2B 荒れ果てるイスラエル 4-11

そして 4 節から、栄光が失われるイスラエルの預言が始まります。これもまた、皮肉なことです。周囲の国々の預言を神が行われている時に、聖別されていなければいけないイスラエルが、同じように栄光を失います。不信者と同じくびきをいっしょにつけてはいけないという、パウロの戒めの

言葉を覚えたいものです。(Ⅱコリ 6:14-15)

1C わずかに残された者 4-6

⁴ その日、ヤコブの栄光は衰え、その肥えた肉は痩せ細る。⁵ 刈り入れ人が立ち穂を集めて、その腕に穂を刈り入れるときのようになる。レファイムの谷で落ち穂を拾うときのように。⁶ オリーブを打ち落とすときのように、取り残しの実が中に残される。こずえには二つ三つの熟れた実が、実りの多い枝には四つ五つが残される。—イスラエルの神、主のことば。」

「その日」とあります。つまり、これは北イスラエルがアッシリアによって倒れることだけではなく、終わりの日にイスラエルがどのようなようになるのかを示している預言です。その日に、ヤコブの栄光は衰え、やせ細ります。エフライムは豊かで、肥沃な土地でありました。その誇りが取り除かれるのです。それを形容するために、その神の裁きを刈り取りに喩えています。イエス様も、毒麦の喩えを語られた時に、「収穫は世の終わり」だと解き明かし、こう言われました。「マタ 13:41-42 人の子は御使いたちを遣わします。彼らは、すべてのつまずきと、不法を行う者たちを御国から取り集めて、火の燃える炉の中に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ざしりするのです。」

そして、刈り取った後に残されたもの、また落穂に喩えています。レファイムの谷は、エルサレムの南東に走っている谷ですが、ユダの民には落穂拾いはよく見慣れた光景です。オリーブの木でそれを揺すって、僅かに残っているのも見慣れた光景でしょう。こうやって、生き残る者たちがごく僅かになるということです。

2C 自分の造られた方 7-11

⁷ その日、人は自分を造った方に目を留め、その目はイスラエルの聖なる方を見る。⁸ 自分の手で造った祭壇に目を留めず、自分の指で造った物、アシェラ像や香の台は見ない。

多くの者が滅ぼされますが、それは神の民の清めのためであります。主の愛は、変わりません。しかし、聖なる方を、自分たちを造った方に目を留めるのに、多くの人が死んでしまうという結果を刈り取らなければいけません。残された民は、その時こそ人が造った神ではなく、自分を造られた神に頼ります。ここまではならないと、神に頼ることを学べないのか？ということです。神に従わないと、それだけ取り扱いが厳しくなります。主の声は初めは小さいのですが、私たちが拒めばそれだけ、声が大きくなります。注意喚起の声です。しかし、私たちは、辛い方法で教訓を学ぶ必要はありません。

そして、異教の神、アシェラ像などに目を向けません。困った時の神だよりなどという言葉がありますが、偶像は、困った時には本当に役に立たないのです。ところで、彼らの求めるものは、神さえ自分のために利用すること、自分の支配できるのです。つまり偶像なのです。自分を造られた

神をあがめるとは、相手が陶器師のようであり、自分は陶器のような位置にいます。それゆえ、自分というものを全く神に明け渡さなければ、造り主との関係を持ってないのです。

終わりの日における、主のイスラエルに対する働きは既に、イザヤ書 10 章 21-22 節に書かれていますが、イスラエルにとって大患難は滅ぼされるためではなく、練り清められるための神の懲らしめとなります。滅ぼされるためではなく、かえって救われるためです。罪を犯していると、主は、霊を救うために肉を滅ぼされることさえあります。「1コリント 5:5 そのような者を、その肉が滅ぼされるようにサタンに引き渡したのです。それによって彼の霊が主の日に救われるためです。」

⁹ その日、その堅固な町々は、森の中の見捨てられた場所、かつてイスラエル人によって見捨てられた山の頂のようになって、荒れ果てる。

「かつてイスラエル人によって見捨てられた山の頂」とは、ヨシュアがカナンの地に入って、その住民を追い出した後の状態です。今、同じイスラエル人がカナン人と同じ神々を拝んだので、カナン人の町々が荒らされたように、今度はイスラエルの町々も見捨てられた所ようになります。神には、えこひいきはありません。

¹⁰ あなたが救いの神を忘れ、あなたの力の岩を覚えていなかったからだ。それゆえ、あなたが好ましい植木を植え、他国のぶどうのつるをさしても、¹¹ あるいは、あなたが植えた日にそれを生長させ 朝のうちに種を芽生えさせても、病と癒やしがたい痛みの日には、その収穫は消え去る。

救いの神に拠り頼むことを、「岩」に頼るのだと言っています。主に拠り頼むことがいかに変わらぬ、堅固なものであるかを教えています。ところが、イスラエルは「あなたが好ましい植木を植え、他国のぶどうのつるをさして」とあります。アラムとの同盟に拠り頼んだということです。岩と、ぶどうのつるとの対比です。後者は、一時的に花を咲かせるけれども、すぐに、すぐに虫がついたり、病にかかったりする、頼りにならないものなのです。人間的な助けは、ほんの一時的なものであり、その後は大変な痛手を被るのです。

3B 国々のどよめき 12-14

主は、再び、これらの神の裁きに用いられているアッシリアについて、預言をされます。彼らが神の裁きに用いられるからといって、彼らを正しくするわけではありません。彼らに対する裁きは、周囲の国々よりも、さらに厳しいものとなります。

¹² ああ、多くの国々の民のざわめき。彼らは、海のざわめきのようにざわめく。ああ、国民のどよめき。彼らは、激流のどよめきのようにどよめく。

アッシリアは帝国なので、「多くの国々」から成り立っていました。多くの国々を征服したことを表現しています。それが、海のざわめき、激流のどよめきに形容しています。

¹³ 国民は、大水のどよめきのようにどよめく。しかしそれは、叱りつけると遠くへ逃げる。山の上で風に吹かれる粃殻のように、つむじ風の前でうず巻くちりのように、彼らは吹き飛ばされる。

これだけの大量の水なのに、突然、つむじ風で拭かれて、渦巻く塵のようになってしまうという、とんでもないことが起こります。ちょうどそれは、エリヤが、いけにえに対して水をたくさんかけさせたけれども、天からの火ですべてを飲み尽くしたのと同じように、圧倒的な力の裁きです。

¹⁴ 夕暮れには、見よ、突然の恐怖。夜明け前に彼らはいなくなる。これこそ、私たちから奪い取る者たちの取り分、私たちをかすめ奪う者たちが受ける割り当て。

一夜にして、18万5千人の、エルサレムを包囲するアッシリア軍が、主の使いに倒れることを、このように前もって伝えておられます。「37:36 【主】の使いが出て行き、アッシリアの陣営で十八万五千人を打ち殺した。人々が翌朝早く起きて見ると、なんと、彼らはみな死体となっていた。」このように、たちまち滅ぼされることこそが、彼らの取り分なのだということです。つまり、何一つ奪い取ることはできないのだということです。

2A 力強い国クシュ 18

このように、主ご自身がご自分の栄光のゆえに、救いのみわざを行われます。次に、一気にイスラエルの南にある国に移ります。南、アフリカには、二つの大国がありました。エジプトであり、さらにその南にはクシュがありました。どちらも、ナイル川によってうるおい、豊かで強力な国でした。そこに対して、主が彼らに何を教えるかを見ていきます。18章は、クシュに対する預言です。

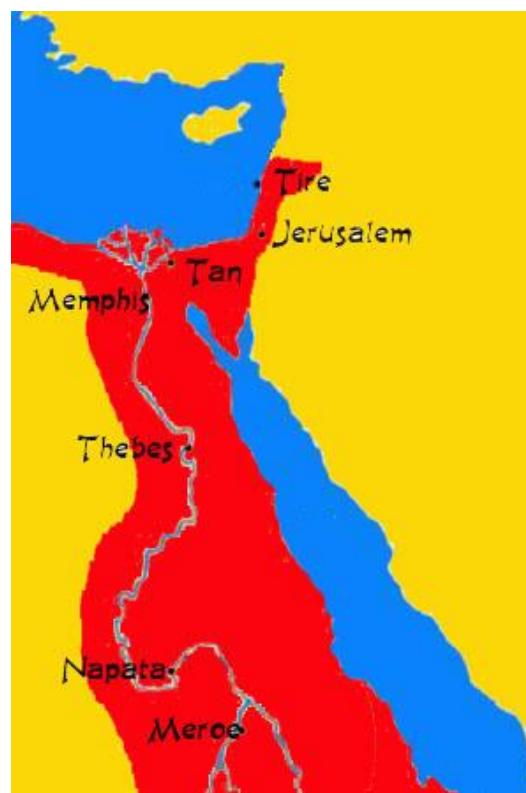
1B 誇り高き国 1-2

¹ ああ、羽コオロギの国よ。この国はクシュの幾多の川のかなたにあり、² パピルス（紙の原料）の船を水に浮かべて、海路で使いを送る。すばやい使者よ、行け。背が高く肌の滑らかな国民のところへ。あちこちで恐れられている民のところへ。その国土を多くの川が分けている、力強い、踏みにじる国へ。

クシュは、ノアの息子ハムの息子として初めて出てきます。「ハムの子らはクシュ、ミツライム、プテ、カナン。(創世 10:6)」とあります。ミツライムはエジプトの別名となり、プテはリビアです。カナンも、ハムから出てきました。

クシュはエチオピアとも訳されますが、今のエチオピアよりもはるかに広域を支配していて、エジプトの南にある大きな国、スーダンまでの国でした。非常に栄えた文明です。「羽コオロギの」とありますが、これはクシュが非常に蒸し暑く、羽の付いた虫が多いことで有名だからです。

エジプトと同じようにナイル川上流の川々によって非常に発展して、一時期はその勢力範囲をナイル川全域とイスラエルのところまで及ぼしていました。ここの「幾多の川」とはナイル上流の支流のことを指しています。ヨシャファテがユダの王の時に、クシュが攻めてきて、それはとてつもない大きな軍隊でした。「Ⅱ歴代 14:9 さて、クシュ人ゼラフが、彼らに向かって百万の軍勢と三百台の戦車を率いて出陣し、マレシヤにまで攻めて来た。」



当時ピアンキというクシュの王が、紀元前 730 年ごろからエジプトを支配し始めました。そして、エジプトの国を 715 年から治め、第 25 エジプト王朝が始まりました。ですから、当時のエジプトはクシュと重なっていたと考えていいです。しかし紀元前 671 年にアッシリアがエジプトに侵攻しました。その時にクシュはエジプトから撤退しました。

2 節に「背が高く肌の滑らかな国民」とありますが、これはクシュ人たちが自らを誇っている言葉です。イスラエル旅行で遺跡を見ると、当時の人々がどれだけ背が低かったのか分かりますが、おそらくクシュ人たちは、現代の私たちとあまり変わらない背丈だったのかもしれませんが、そして、「肌が滑らか」なことを誇っていますが、セム系のイスラエル人やその周囲の民族は体毛が多かったのですが、彼らはそれほど体毛もなかったのでしょう。

そして、「パピルスの船を水に浮かべて、海路で使いを送る。」とあります。クシュが使者をユダに送っているのです。ナイル川を下り、そこから地中海に出たのでしょう、そしてユダに到着して、自分たちのところに、使者を送ってアッシリア対抗のための援軍を頼んで来い、と言いつけています。アッシリアの脅威に対して、人間の力に頼りなさいという誘いをしているのです。何か大きな力が与えられると、私たちはどうしても、「こうしたらいい、ああしたらいい」という誘いが来ますね。

2B 暑さの静けさ 3-6

³ 世界のすべての住民よ。地に住むすべての者よ。山々に旗が揚がる時は見よ。角笛が吹き鳴らされる時は聞け。

クシュに対して主が語られています。クシュは自分たちがいかに力強いかをユダに誇示しましたが、主ご自身は「世界のすべての住民よ。地に住むすべての者よ。」と応じておられます。主は、全世界を相手にして、これからわたしの行なうことを見ていなさいと言われるのです。これはちょうど、450人のバアルの預言者に対抗するたった一人のエリヤのような感じであります。影響力を持っているかのように見えるバアルの力は、主なる神との力の前では無に等しいです。そして、「山々に旗が揚がる時は見よ」と言われていますが、アッシリア軍がシオンの周囲の山々に旗を揚げ、角笛を吹き鳴らしているのです。

⁴ 主が私にこう言われたからだ。「わたしは静まり、わたしのところから眺める。照りつける日差しの暑さのように、刈り入れ時の暑さの中の雨雲のように。」

アッシリアが来ることは大きな騒ぎであります。その騒ぎをさらに煽るように力のあるクシュが騒いでいるところを、主は、「わたしは静まり、わたしのところから眺める。」とされています。クシュの人たちによく分かるように、その静けさを彼らの気候を使って例えておられます。じいっと、蒸し暑いところで動かない濃い雲のように、動かない、動かないということです。

⁵ 刈り入れの前、花が終わって、花房が熟したぶどうになるとき、人はその枝を鎌で切り、そのつるを取って除き去るからだ。

これは、アッシリアの横暴が実を結ぶまで主が待っておられる、その暴力の実がたわわになった時に一気に刈り込みを入れるということです。イエス様が戻ってこられる時にも、同じ表現が出てきます。「黙 14:18 すると、火をつかさどる権威を持つ別の御使いが祭壇から出て来て、鋭い鎌を持つ御使いに大声で呼びかけた。『あなたの鋭い鎌を送って、地のぶどうの房を刈り集めよ。ぶどうはすでに熟している。』」主が、熟しているところまで待ち、それから刈り取られます。このように神の裁きは、忍耐深く、かつ試されるものです。忍耐深いというのは、一人一人が悔い改め滅びを免れることができるまで待っておられる、ということであり、試されるというのは、裁きが速やかに行われぬように見えるので、「神は裁かない」と勝手に決めつけて、悪事を働くことです。

⁶ それらはみなともに、山々の猛禽や野獣のために投げ捨てられる。猛禽はその上で夏を過ごし、野獣はみな、その上で冬を過ごす。

主に打たれて積み上げられたアッシリア軍の死体を、猛禽がついばむ姿を描いています。当時

の人々は、死体がどのように埋葬されるかにその人に尊厳がかかっていましたが、これは最も卑しい姿であり、神の徹底した裁きを示しています。ハルマゲドンの戦いでも、黙示録 19 章では、全世界の軍隊の死体が積みあがっているのを猛禽が食べるのを、「神の宴会」と呼んでいます。

3B シオンの山への贈り物 7

⁷ そのとき、背が高く肌の滑らかな民、あちこちで恐れられている民、その国土を多くの川が分けている、力強い踏みにじる国民から、万軍の主の名のある場所、シオンの山へ、万軍の主のために贈り物が運ばれて来る。

ここに主の皮肉を込めた、クシュへの宣告の言葉があります。それは、これだけ自分たちの力を誇っていた彼らが、万軍の主のために、その名が付けられたシオンに贈り物を運んでくるということです。贈り物を携えるとは、王に対する服従を示しています。紀元前 701 年に、ヒゼキヤが王の時にアッシリアが倒れました。これで一気に、その全域の脅威が解かれました。そこでこの預言が実現します。「Ⅱ 歴代 32:23 多くの人々が、【主】へのささげ物やユダの王ヒゼキヤに贈る選りすぐりの品々を携えて、エルサレムに来るようになった。この時以来、ヒゼキヤはすべての国々から尊敬の目で見られるようになった。」

そして、この歴史的出来事には終わりの日の予兆も見えます。ダニエル 11 章には、北の王と南の王の戦いが記されています。南の王とはエジプトです。そして北の王はシリアの王なのですが、途中で反キリスト本人に変わっています。そして次のように書いてあります。「ダニ 11:42-43 彼は国々に手を伸ばす。エジプトの地もその手を免れることはない。彼は金や銀の秘蔵物と、エジプトのすべての宝物を手に入れ、ルブ人とクシュ人が彼につき従う。」反キリストは、エジプトに進出し、それからクシュ人のところにまで行きます。「つき従う」と訳されていますが、これは「足元」とも訳されるので、反キリストの足跡がクシュにまで付いたということです。

そして主イエスが来られます。そして、世界をご自身の支配の下に入れた時に、エルサレムに国々がそれぞれの贈り物を持ってきます。(イザヤ 60:4-6) 新約時代には、エチオピアの宦官が、イザヤ書から伝道者ピリポが解き明かして、それで信じてバプテスマを受けました。自分自身を、贈り物として献げていますね。

私たちが主の内に留まるということは、主が「わたしのところから眺める。」と言われたように、高い所からこの世で起こっている騒ぎを眺めることができるという、静けさ、あるいは冷静さであります。そうした騒ぎに巻き込まれることなく、いかに静まることができるか？ということです。